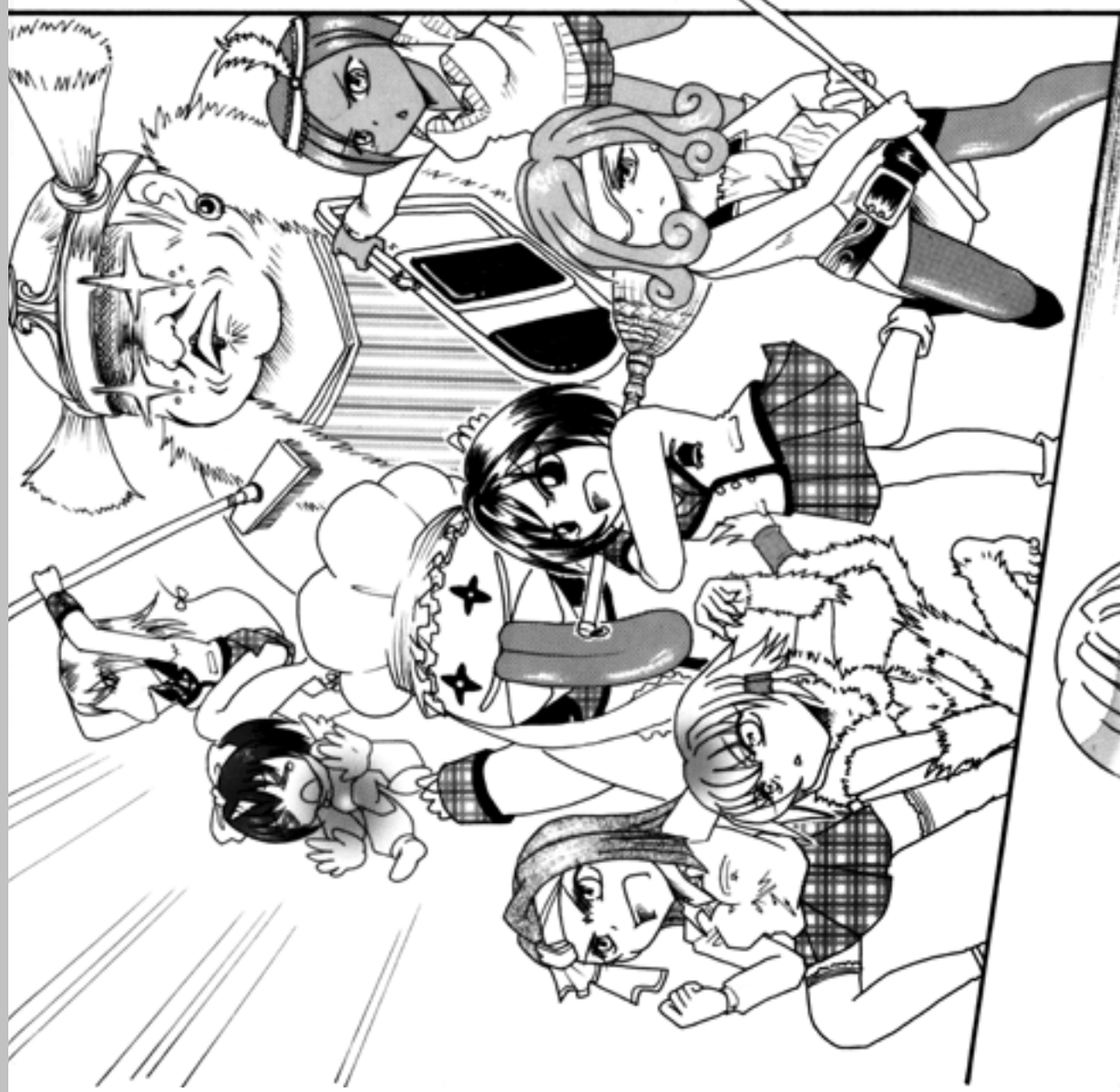

事態が全く飲込めていないジタンの語尾を断ち切るように、氷の声でベアトリクスが告げた。
「お主の手が早い事は承知しておったが、よもやここまで節操のない男とは思わなかったのじゃ。」
フライヤが冷淡な声でそれに続いた。
「え、ええ何の話だよ、どういうことだミコトってちょっとお前何トランスってんの!?」
ミコトの目は冷たかった。それはまさに呑んだくれて帰ってきた父親を見るあの目だった。
嫌ずきる気配にさすがのジタンも青ざめる。が、全く事態の意味が分からない。
「…　え、えーと…ダガー…さ…　…!!」
助けをもとめるように視線を投げた最後の砦、最愛の彼女ダガーとガーネットは…。
既に召還獣を喚んでいた。
ばさらー！　とジタンの前に紙切れの束を突きつけた。
「ひい!?　な、なに」
「これ。今日、ＰＴＡ会長のお母様のところに届いたそうよ。」
そこにはびっしりと、女の子の名前とアドレスが書き記されていた。
「…え!?　な、なんだよこれって」
「んー？」
束をひっつかんで肩を振るわすジタンの後ろでゴルベーザが何かに気づいて唸った。
「…気がつかなかったが、この主人公ヒル、横にまだ記載があるな。」
「え、何」
われわれとジタン以外の面々が寄ってくる。まるでこれからジタンにおきるであろう恐ろしい現実から目をそらすかのように。
ゴルベーザがマウスのホイールを横にスクロールさせる。初期画面から遠く離れたセルには…デートの予定がびっしりと書き込まれていた。秒単位で。
「な、なんじゃこりゃあああああ!!」
「うわー　ジタンすげえスケジュールだ!!」
ジタンの絶叫とバッツのツッコミはほぼ同時だった。
「只の連絡先、そう言っておったのを信じたのにな。わしは…フラットレイ様にどう言い訳すればよいのじゃー」
フライヤが涙を流しながら叫んだ。
「い、いや本当に連絡先のつもりだったからー　俺、彼氏のいる子のなんて手え出さないって…！」
「ふん、盗賊の言葉などやはり信用できんな。私の住所はスタイナーからでも聞き出したのか。」
ベアトリクスが語尾をぶつ切り被せた。
「いや、たまたまおっさんの携帯入っちまったもんだからついつい…　じゃなくて、ダガーと連絡つかないときのためにと思って、いや、ホント」
さらにぶっちぎったのは演劇部仲間の幼なじみルビィ。
「ジタンの女好きはまだ紳士のうちやと思っとったけどな。ウチのテーム予定ニニ被っとるやん。なにこれダブルデートでもする気やったんか？」
「ちょ、マジかよ!?　俺がそんなくマすわけねーだろルビィ…きゃー　ホントだ！」
「ブランクにヤキいれてもらうわ。石化漬投3日の刑。片足で執行。」
「ちょー　やめてあれ死ぬほどキツい」
「ひどいわジタン！　エーコの事は遊びだったのね!?」
「いや本気だったら犯罪だろそれ!!」
「ワタシの事も遊びだったアルねー」
「心当たりねぇ――！」
「あまつさえ!!」
ドカン!!
静まり返る程の足音を立てて凄んだのは　…ガーネットだった。
ジタンの叫びは音にすらならなかった。
「　ダ　ダガー　さん　…？　」
ばさらと、既に固まったジタンの手から紙束をひったくり、ぱらぱらとめくって、ずいと突きつけた一枚に書いてあった名は。
「……お母様にまで…手を出すだなんて……!!」
「ぜってえねえええええええええええええ――!!」
象女　ブラネはこの女のように泣いていた。

「最低。」

ボソリ、呟かれたミコトの言葉を合図に、

ジタンは終了した。